

第14回 国病久原会 総会 記念講演 平成22年10月16日

於 活水女子大学看護学部大講堂

閉校にあたり看護学校の回顧

国病久原会 副会長

浦山 康子

故 浦山 康子様 ご略歴

国立大村病院附属高等看護学院卒	6回生	昭和30年
同	専任教員	昭和40年
国立小浜病院	総看護婦長	昭和57年
国立療養所大牟田病院	看護部長	昭和61年
国立嬉野病院	看護部長	平成元年
勲5等瑞宝章	受章	平成9年

平成29年8月30日 ご逝去



本校の開設

さて本院は、昭和20年(1945)12月1日、前身であります大村海軍病院から厚生省に移管され国立大村病院として発足しております。

戦後の混沌とした社会情勢のなか、福祉国家として再出発するに当り、看護水準と保健婦・助産婦・看護婦の資質の向上を図ることを目的に、国は看護制度改正をし、それに基づき全国の主要な国立病院17校に甲種看護婦養成所の設置が認められ、本学院もその中の1校として、他に先がけて発足しております。

敗戦後の日本が歩いてきた多難な歴史と共に、あらゆる面で困難な時代だったと思います。ご存知のとおり昭和23年には教育体制が「6・3・3・4」(小・中・高・大)となり私もこの制度改革を経験したものです。

当時の日本は米軍の占領下であり、思想、政治、教育、すべてが米軍最高司令部の指示で動く激動の時代だったと思います。何一つ指図を得なければ、自主的に事

を運ぶことは出来ない状態だったのです。司令部の担当官の視察も多く、長崎軍政部のミスパーカー女史やミスアイテル女史など定期的に巡視し学院を厳しく監視、指導されたそうです。この巡視をミスパーカー旋風等というて極めて恐れられていたそうです。

新しい制度に変わった教育といっても、明確な基準・教育の為の校舎・教育機材も無い中で、初代学院長篠崎哲四郎先生を初め教務の諸先生、関係職員の方々のご苦勞は計り知れないものがあつたと思います。

衣・食・住・は勿論、生活環境の不自由を常としながら、新しい看護教育に懸命に取り組まれた、諸先生、また先輩諸姉の新しい制度に基づく教育に、学生としての誇り、たゆまぬ努力があつてこそ今日の看護学生の素地作りとなつた事は確かだと思つた時、只々感謝するものです。あれから60余年が経過いたしました。

看護学生入学当時

昭和22年10月1日第1回生18名が入学されております。当初学院は看護婦(師)宿舎の若草寮が当てられ、教室と実習室、教務室等があり、一部は看護婦(師)の宿舎になっていたようです。当時は全寮制で場所は現在の救急車入り口付近かと思つた。

夜勤明けの看護婦(師)が仮眠していると、教室では学生たちが講義の合間に飛び跳ねたり歌ったりして怒られることもしばしば。「今も昔も変わらぬものよ」と聞かされ苦笑するものでした。

昭和23年4月第2回生42名が入学、1回生の1年生と2回生の1年生と1年生が2クラスになり、どのように呼んでいたのかと尋ねますと1年生A(1回生)・1年生B(2回生)とよばれていたようです。また1回生が3年生になりますと(上級3年生)4月に2年生が3年生になると(下級3年生)と呼び名もA・Bから上級・下級と呼んでいたそうです。

看護学生寮

学生寮は若草寮、病院のほぼ中央に位置する手術室前に学院があり、その1階が宿舎で2階が講義室・実習室・教務室等になっておりました。

学生寮も、学生数の増加に伴い二転三転、昭和31年2月、第3倉庫を改装し120名収容の寮へ移りました。開学より10年経ち全学生が一つ屋根の下で生活できる様に成りました。また学生食堂も海軍時代の車庫を改装して120名収容の学生食堂が出来ました。

寮生活について

学生の寮生活は規則正しいもので朝 6 時に起床、全学年寮の玄関前に集合し「ナイチンゲールの誓詞」「ラジオ体操」「舎監の先生の連絡」その後、「寮全体と・自室の清掃」など、「食事も当番による配膳」朝食後は学校で講義・実習へ行っていました。講師の都合で、講義の休講はいずれの回生も嬉しかったのですが、当時は自己学習の時間になることは無く、直ぐに実習に切り替えられていた為、実習場によっては、東浦病院近くの木立ちの中や、部屋の押入れが実習場になる時もあり、先生にお叱りを受けていたことを思い出します。

寮は 22 時消灯でした。起床から消灯まで規則に縛られた生活でしたが時にはクラシック音楽を聴き、ハレルヤコーラス等歌い楽しみました。また休日は外出願いを出して映画観賞や山登り、大村湾でボートを漕ぐ、また、みかん狩り、キャンプ等々、若い先生やインターンの先生達と一緒に遊んだものでした。また芋ほりの手伝いに出かけたりしました、食糧難のこの時期帰りに頂いた芋は大変貴重なものでした。中でも映画観賞は娯楽のないこの時代には大きな楽しみでした。

市内までの交通手段は歩いていく以外になく、門限に間に合わないと言われ舎監の先生に酷く怒られるので、息を凝らして静に抜き足差し足で帰るそのスリルは今尚、当時の思い出話として語り継がれていますが、運よく見つからず寮に辿り着いたとしても、入り口は施錠されており窓を開けて引っ張り上げてもらうこともしばしばあり、双方が共犯となる始末でした。

開学当時の食事

終戦後 2 年経っても食糧難は改善されず一日の生活の中で食べ物に対する関心は高く、いつも空腹でそれを満たすことが最大の関心事で、今日の昼食は「黒い芋団子」かしら「ザラメの砂糖」？夕食は何だろうか「すいとん・お芋」？と代用食が当たり前の時代でした。しかし辛抱にも限界があり背に腹は代えられない思いで、近所や知り合いの人(家)からお芋やお米・粟など、分けて頂き、金の洗面器を火鉢にかけ、芋を蒸す、芋粥や粥を作り、お部屋の同僚と分けて食べた思い出があると聞きました。当時は不自由な中、皆で助け合いながらよく辛抱出来たものだと思うと同時に、お互いを思いやり助け合う心が培われ、今では貴重な体験で宝物の存在だと話されました。(芋団子の粉は黒いものだと今まで思っていたのに、本当は白っぽい粉だったのね)と当時を振り返って話されました。

或る日久々に先輩と一緒に食事をする機会を得ました。メニューを手にした先輩が

この頃、娘と食事に行ったらね、娘が「お母さん栗ご飯があると書いてあるよ、食べてみましょうよ」「栗ご飯なんていや、お母さんは若い頃いやという程食べたのよ」と言うと、「エ〜お母さんの若いときおしゃれな食事をしていたのね」娘の言葉に只々呆然として返す言葉無かったのよ」と話されました。あれから半世紀余り過ぎ、すべてが当時を物語っていました。

初代学院長の訓示

初代学院長の篠崎哲四郎先生の看護教育の理念ともいえる学生への言葉に「将来看護界をリードするナースを育てる」「インターナショナル・ナースとなれ」「世界の篠崎の門下生たる君達は、日本のみならず世界に通じる看護者たれ」また、合格点に満たない者は「カバンの用意をしろ」と、事あるごとに聞かされました。とても厳しいものでした。

また、「看護は科学であり、哲学であり、芸術であり、そして職業である」、この言葉は戦後 GHQ の看護課長として来日されたグレース・エリザベス・オルト女史の看護の本質の中の言葉と聞いております。心に残る言葉でした。

科学	それは看護を科学する目（知識）根拠に基づくもの……
哲学	それは生命へのあり方（態度）……
芸術	それは美につながる手の技（技術）……
職業	それはプロ意識に徹する（専門職）……

当時の荒廃した社会にあって生活もままならないこの時期だけに学院長の訓示は学生にとって何があっても頑張らなければいけないと思ったものでした。

開学時の教育

1回生〜3回生までは教科書も無く、各専門の臨床の先生が講義に見え、当時はドイツ語に英語を交えた講義で講義内容も難しくノートの筆記がすべてで書き写すのに必死だったそうです。講義内容は能力以上のもので高度且つ格調高く、当時はインターの先生がしばしば聴講にお見えになっていたそうです。

講師の先生によっては、ガリ版刷りのプリントで講義をしてくださる時もあり筆記の必要のない講義はとても好評だったそうです。ノート整理も大変で冬は寒く火鉢を囲んで暖を取りながら、消灯後は毛布に包まり懐中電灯の光を頼りに勉強する毎日だったと聞いております。

しかし、正規の授業以外の文化活動も盛んで、医師・看護婦・インターンの先生・看護学生など週一回開かれたコーラスの練習やレコード鑑賞会・米人による英語のバイブルクラス・日本語の聖書研究会などがあり、クリスマスの前などコーラスの猛練習をしてクリスマスの本番に臨み、ハレルヤコーラスを歌った時は会場一杯の人々の拍手だった、と記されています(元管理者・小谷千代記)厳しい社会環境の中にあつて、心の豊かさを感じるものです。

昭和 25 年入学の四回生から、赤い表紙の教科書が間に合い教育課程(カリキュラム)に沿った科目別の看護学(内科学及び内科看護法・外科学及び外科看護法)など教育内容も年毎に整い始め、教養科目として国語・英語・音楽・体育と専門の講師や大学教授による講義が行われるようになりました。新しい看護教育への期待はことの外大きく、学院長はじめ看護教育に携わる諸先生の熱意には感動するものがありそれに応える努力を惜しまなかったと聞いております。

社会の大きなうねりの中にあつて、教育環境の不備など問題視すること無く高度な教育を受けている事の自覚と誇り持って前向きに取り組んだことを今更の様に思い出すと話されました。

また、全身麻酔に人体実験で成功を収めた華岡青洲の偉業と、その妻の生涯を話して下さった外科の吉浦先生、医療に携わる者の姿勢や、また僕から聴診器を取ったとしても後に残るものにテニスがある、君たちも勉強とともに運動もしなさいと励まして下さった内科の石井先生等、その時々事例や体験を話して下さい今は亡き諸先生を思い出します。

臨床実習で学ぶ

当時は講義も実習も白衣のワンピースにキャップ姿で臨んでおりました。戴帽式後 1 年生はキャップに 1 本線、2 年・3 年と線が一本ずつ増え、その重みを感じたものです。

今は戴帽式に代わる誓いの日になっていますが……戴帽式の意義は意義として古い卒業生にとっては忘れることの出来ない感動の思い出です。

看護教育の中で臨床実習の占める割合は大きいといわれますが、開学当初の実習は実習生も何をして良いのか判らず、指導する病棟側も何を教えてよいのか判らなかつたと思います。その当時は病棟に検査室があり簡単な尿・便・血液の検査が出来るようになっていて、医師や看護婦に聞きながら血球計算や血液像の見方などしておりました。その他、汚物交換・(尿・便器・痰コップ)湯たんぽの湯の交換・配膳・また病棟で採取した検体(検査科)の提出など、暑い日も寒い日も動線距離の長い渡り廊下を走り回り、便利屋さんのような記憶があると話されました。私も昭和 30 年

頃に経験したことがあります。

40年代になると看護の対象である人間の理解を根底にした総合看護実習でした。しかし実習場の勤務体制はベッド数50床に看護要員は婦長を含む13名でした。実習生は、2年生が6名・3年生が6名と受け入れる病棟側も大変でした。当時は指導に当たる看護婦も受け持ち患者のケアや業務を遂行するのに精一杯で学生の指導までは手が届かない状況でした。しかし看護婦の看護に取り組む姿勢こそが指導であり、意図的な教育以上の効果を期待したものでした。しかし短期間の実習で学習効果を上げるには専任の実習指導者の必要性を強く感じておりました

また、ある病棟での医長回診は医長につづき主治医・インターンの先生・婦長・担当看護婦・学生と一見、大名行列を思わせるものでした。しかし一見のどかに思われるかも知れませんが医長から参加職員や学生に容赦なく質問されたり、また説明を加えたりされることが勉強になっておりました。

しかし受け入れ側の指導体制もカリキュラムに則り徐々に改善されて来ましたが現在と比較すると、教育環境の不備な中幾多の困難を乗り越えて学んだ体験は当時の学生の心の糧として、今尚生き続けていると思うものです。

学院校舎の変遷

開学時の若草時代から病院のほぼ中央に位置した学院時代を経て、旧12病棟の跡地に開学より8年目に新校舎が建てられました。ここが通称アカシヤの丘です。

あかしや丘の校舎

校舎は背に多良岳の峰を遥かに望み、西には波静かな大村湾の美しい眺望と校舎の周囲は小鳥達のさえずり、多くの樹木とあかしや樹に囲まれた静かな場所でした。春にはあかしやの白い花が咲き、風に揺れて匂う風情は学ぶに相応しい教育環境でした。学院に通じる道の両側にはパンジーやサルビア等の草花を植えていました。

卒業生の記念樹は篠崎学院長の心遣いで、夏には緑陰を、冬には落葉し陽が降りそそぎ学生の疲れた頭を癒すに相応しい細かい配慮が伺えました。時には校舎の傍の木立ちの中を一行に並んで歩く、こじゅけい(小鳥)の可愛い姿に安らぎを覚えたものでした。

昭和44年2月、二十回生の卒業を目前に病院の整備計画により市営住宅に校舎は売却されました。悲憤の思いで学舎に別れを告げ、旧3病棟に移転しました。卒業生より贈られた記念樹は卒業生の形ある魂と思い 1本も残すことは出来ないと当時教務主任の野口絹江先生・教員の浅生慶子先生と私、浦山は休日を返上し事務職

員の方のご協力を得て全てを移植いたしました。

元 3 病棟の頃

昭和44年2月元3病棟に校舎は移転し20回生の卒業式が2階で行はれました。切々と訴えた涙の答辞を今でも思い出します。

学院の不慮の火災(昭和47年9月23日)

不慮の火災により校舎は消失し、元1病棟を仮校舎にして翌日より授業は開始されました。「開学25周年記念行事」が9月30日・10月1日に予定されておりました。火災より一週間、記念行事中止の声も危ぶまれた中、火災の衝撃で呆然としているとき「形ある物は失っても私達が居るじゃありませんか」という学生(24・25・26回生)の前向きな希望と熱意・そのエネルギーは関係職員を動かし一連の記念行事は予定通り開催されました。800名余の参加者を得て意義ある記念行事となりました。学生はもとより病院職員や・卒業生・多くの方々のご支援ご協力に感謝とお礼を申し上げます。また学生や卒業生の温かい言葉や励ましの言葉を聞くたびに失った物も大きいけれど「彼女達は宝物である」としみじみと話された教育主事の今は亡き野口絹江先生の言葉を思い出します。同窓会も昭和28年に結成されており同窓会よりテニスコート一面、開学25周年記念に寄贈いたしました。(元若草寮跡に設置)

新校舎の完成

昭和48年7月念願の耐火構造の新校舎2階建・宿舎4階が完成し移転、永年待ち望んだ新築校舎となり現在に至っています。

カリキュラムの改正

開学当初は「科目別」に担当の医師が講義をされておられました。医学概論・解剖生理・細菌学・病理学……など等、年を追う毎に科目も増えてきました。

科目ごとの講義は、例えば(内科学・内科看護法 外科学・外科看護法・伝染病学・伝染病看護法と各科目に講義がなされその科目数40科目を超えておりました。

昭和43年(実施)新カリキュラムが改正実施されました。

その改正の目的は技術の習熟のみでなく人間形成と専門技術の基礎的理解と応用能力を養う。総合保険医療の立場に立って看護を把握する。

そこで総合看護の考え方

看護学総論・成人看護学・小児看護学・母性看護学・の4つの体系に分類されました。短期大学を指向したカリキュラムが組まれました。

次に、平成2年(実施)カリキュラム改正が行われました。

21世紀の看護のあり方

骨子と成ったのは

- * ゆとり教育
- * 高齢社会に向けた継続看護
- * 在宅看護を可能にする教育
- * 包括医療をめざす・(疾病の予防～健康教育)

当看護学校では当時の教育主事の内海文子先生が平成6年から訪問看護実習を先取りし、大村市医師会訪問看護ステーションで実施されております。

このカリキュラムは大学教育を指向したカリキュラムが組まれたと聞いておりました。

平成9年(実施)カリキュラム改正

この改正案は教育内容の充実……

ここで新たに在宅看護論及び精神看護学が新設されています。単位制の導入など(年間授業時間が35週)とされました。

医療を取り巻く社会の変化即ち

- * 医療の高度化
- * 高齢化社会
- * 疾病の重症化
- * 医療の安全確保
- * 看護の質の向上が求められ看護の基礎教育の充実

が図られています。

開学以来3回(昭和43年・平成2年・平成9年)教育過程が示されております。医療を取り巻く社会の変化に対応し得るものとしてカリキュラムの改正は当然ながらその時代の社会背景によるもので、カリキュラムも従来の「科目」により教育内容が規定されていたのが、基礎看護学・成人看護学・老年看護学・母性看護学・小児看護学に加えて在宅看護論・精神看護学が加わって7つの分野に設定されております。

看護も施設医療のみでなく地域医療の一翼を担って在宅訪問看護が実施されていきます、大別すると施設医療は治療の場での看護であり、在宅看護は生活の場での看護です。また看護が料金化されました。商品として看護の質が問われ、このことは看

護史上画期的な事です。

看護も対象の状況に応じた実践ができる為には適切な判断が求められ、その判断の根拠となる知識が必要と思うものです。

おわりに

本看護学校も平成 23 年 4 月 1 日で 64 年の歴史の幕を降ろすことに成りました。物事には始めがあれば終わりがありますが、創るときの決断と閉じる時の勇気が求められると言われます。

社会情勢の変化に伴い人々の医療に対するニーズも複雑多岐に亘り、高度な医療・質の高い看護が求められています。

日頃より看護教育は 4 年以上の大学教育の必要性を肯定しつつも現実に閉校の日が訪れるのだと思うと寂しさを禁じえません。

しかし 64 年もの長期に亘り灯し続けた看護教育の灯が、設置主体の違いはありますが、長崎医療センターの敷地の中に受け継がれ灯し続けられたことは看護師の先輩である長崎医療センターの卒業生にとりまして本当に良かったと思います。

活水女子大学看護学部看護学科の学生の皆さんが立派な人として・看護師として研鑽されます事を祈念いたします。

また、学校長の米倉先生には閉校は苦渋の決断だったと思いますが同時に発展的解消だったと思うものです。また、今日まで歴代の学校長を始め、教育関係者方々、病院職員の皆様のご指導・ご協力・ご支援・を頂きました事、同窓生一同を代表し心から感謝とお礼を申し上げます。有難うございました。

尚、同窓会は存続いたしますので今後とも宜しく願ひいたします。

(本講演は平成 22 年の国病久原会総会の記念講演として行われ、当院の歴史に触れた貴重な報告と思います。幸い、浦山様の遺品のなかに、本講演のデータが残っていることが分かり、ご遺族のお許しを得て当会HPに搭載することにいたしました。今は亡き浦山様を偲んでいただけるものと思います。又、かつて、当院の中に附属看護学校が存在していたことなど、病院と看護学校が一体となって戦後の国立病院の復興に尽力した足跡を読んで頂けたら幸いです。

国病久原会会長 廣田典祥)